

石狩紅葉山49号遺跡から出土した木製容器について

Wooden vessels of the Middle Jomon period excavated
from Ishikari Momijiyama No.49 Site, Hokkaido, Japan

荒山 千恵*

Chie ARAYAMA*

要 旨

石狩紅葉山49号遺跡から出土した縄文時代中期（約4000年前）の木製容器は、舟形の浅鉢状容器や皿状容器、柄付容器等があり、横木取りした一材を加工して仕上げる製作方法が基本である。器に用いられた樹種はハリギリが約半数を占めており、器を製作する材として選択していた可能性が考えられる。現代の工具を代用して実寸大による器の復元製作をおこなった結果、当時の木製容器の製作において、製材する段階から器細部の形態的特徴を考慮した計画性のもとに作られていたことが明らかとなった。

キーワード：石狩紅葉山49号遺跡，縄文時代中期，木製容器，製作技術，復元製作

1. はじめに

石狩市花川、発寒川の畔に位置する石狩紅葉山49号遺跡では、湿地部において検出された縄文時代中期（約4000年前）の河川跡に伴い多くの木製遺物が出土した（石狩市教育委員会，2005）。小稿では、その中から、特に木製容器について取り上げる。石狩低地帯およびその周辺に位置する低湿地遺跡では、縄文時代に属する木製容器の出土が確認されているが、それらは主に縄文時代後期に属するものであり、縄文時代中期の出土例は知られていない。石狩紅葉山49号遺跡の出土資料を通して、当該期の木製容器の特徴について検討する。

2. 木製容器の集成と分類

本遺跡において木製容器と推定された遺物は、破片資料、未成品の可能性のある資料を含めて計33点である（付表1，付図1，2，写真1）（註¹⁾。本章では、これらの木製容器を素材および形態的特徴から整理する。

第一に、素材についてである。材料として用いられた樹木の部位から見ると、樹幹製容器と樹皮製容器に分けられる。本集成において樹皮製に該当するものは1点のみであり、その他はすべて樹幹製である。第二に、器の形態的特徴から見てみると、柄の有無により分類される。柄のある容器に該当するものは3点、その他は柄をもたない容器もしくは破片であるため柄の有無について推定が困難な資料である。さらに、器形の特徴から細分し、ここでは「タイプA」から「タイプE」までの5分類を提示する（表1）。以下、各タイプの



写真1. 石狩紅葉山49号遺跡出土の木製容器／
縄文時代中期。（石狩市教育委員会2005）

* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

表1. 石狩紅葉山49号遺跡出土の木製容器の分類（筆者による分類）.

素材とされる樹木の部位	柄の有無	器 形	タイプ	想定される機能
樹 幹	無	舟形の浅鉢状容器 石狩紅葉山49号遺跡から出土した容器類の樹種 (樹種特定された容器類22点)	A	盛る
		舟形の皿状容器		
	有	底部に高台のある漆塗の 浅鉢状ないしは皿状容器	B	掬う
		スプーン形の柄付容器	C	
		ボウル形の柄付容器		
樹 皮	無	チリトリ形の柄付容器	D	—
		舟形容器	E	

特徴について述べる.

「タイプA」は、舟形の浅鉢状容器もしくは皿状容器である（例：付図1-1～7，付図2-8～14）

（註2）. 本遺跡の木製容器の多くはこのタイプに該当する. 横木取りの木材を加工して作られることから、舟形の器を作ることが可能となる. 大きさは、長さが30cm前後から1mを超えるものまでがあり、大小さまざまである. また、器の長さとの比率もさまざまで、木材の大きさや特性に応じて作られたものと考えられる. 器形では、①底部から側面の立ち上がりを明瞭に作るもの（例：付図1-1・2・3・4，付図2-14），②底部から側面の立ち上がりが丸みのあるもの（例：付図1-7），③側面の立ち上がりが緩やかで浅いもの・側面をもたない皿状のもの（例：付図2-8，2-12）がある. これらの器に特徴的な点としては、器の端部に造形的な加工を施すものが複数に認められることである. 例えば、付図1-1・2・3は、器の両端部をやや高くし、その中央部に耳状の突起を作り出す. また、これら3点はいずれも片方の耳状突起にのみ孔ないしは溝状の加工を施し、もう片方には施していない. 左右両端部の細部の加工を非対象とする特徴が共通している点は注目される（註3）. また、付図1-5・6では、端部の多くを欠損しているものの片側端部に突起状の残存部がみられ、付図2-8にも片側端部に耳状ないしは突起状の残存部が認められる. 付図1-5・6や付図2-8の残存状況から

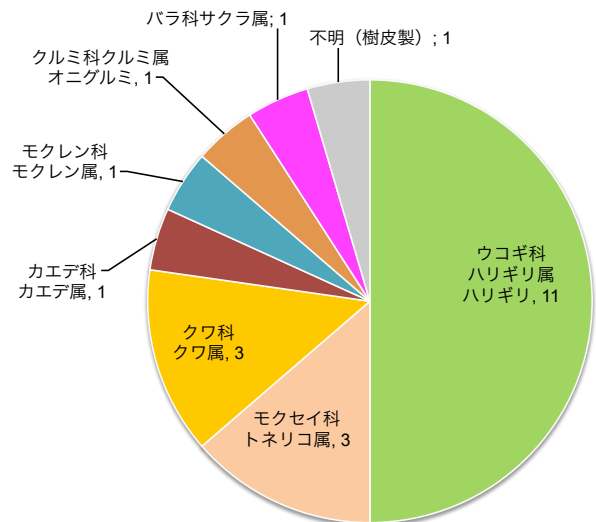


図1. 木製容器の樹種（石狩紅葉山49号遺跡）.

は、両端部に突起状の形態が作り出されていたか判断することは難しく、片側端部のみに作られていた可能性もある. これらの器端部にみられる加工が機能的な役割を果たすために作り出されたものなのか、それとも装飾的に表現されたものなのか. 今のところ十分な確証は得られていない. 一つの木材を加工して作られる木製容器では、粘土のような可塑性のある素材のように端部の高まりや突起等を後付けするものではなく、削り出さなければならない. したがって、当初からその部分を製作することを念頭に置いて木材の大きさや木取りを決める必要があり、計画性をもって端部を

作り出していたことが考えられる。この点は、後述する復元製作において改めて触れる。

「タイプB」は、底部に低い高台を作り出す容器である。該当するのは付図2-16の1点のみである。口縁部および胴部上半部を欠損しているため全体の形状は不明であるが、底部の残存部から、浅鉢状ないし皿状容器と推測される。さらに、この器には内面に赤漆が塗られている^(註4)。

「タイプC」は、柄のある容器のうち、挟りの浅いスプーン形（付図2-17）、挟りの深いボウル形（付図2-18）が該当する。いずれも容器部と柄部を一つの木材から作り出している。容器部はいずれも丸底である。付図2-18では、柄部の先端寄りの位置に細い溝が一周しており、そこに紐を巻いて吊して使用していた可能性が考えられる。

「タイプD」は、柄のある容器のうち、チリトリ形（付図2-19）が該当する。容器部と柄部を一つの木材から作り出し、底部は平底である。欠損により全体の形状は明らかではないが、舟用具のアカ汲みに類似したものと推測される。

「タイプE」は、樹皮製容器である（付図2-15）。長方形の樹皮の両端部の先端をそれぞれ細くし、2本に裂いて結んで止めたものと考えられており、うち片方の結び目がこれに伴い検出されている（石狩市教育委員会、2005）^(註5)。器の形状としては「タイプA」の付図1-1・2・3にみられる、舟形の浅鉢状容器に類似したものと推測される。

3. 木製容器の樹種

次に、石狩紅葉山49号遺跡における木製容器の樹種についてである^(註6)。樹種同定された木製容器22点のうち、最も多く用いられていたのはウコギ科ハリギリ属ハリギリ（学名：*Kalopanax pictus*）

（別名：センノキ）の11点であり、全体の約半数を占める（図1）。この遺跡から出土した木製品の樹種同定された1349点のうち、最も多いのはトネリコ属（学名：*Fraxinus* spp.）で796点（全体の約60%）を占める。しかしながら、木製容器にお

いてトネリコ属が用いられた例は3点にとどまり、その割合は低い。一方、木製容器の約半数を占めるハリギリについては、遺跡全体の木製品でみると15点と極めて少なく（全体の0.01%）、そのうち11点が容器類に用いられている。これらの点から、この遺跡における木製容器の材料として、ハリギリが選択して使用されていた可能性が考えられる。

4. 製作技術の復元的検討

石狩紅葉山49号遺跡から出土した木製容器は、どのような製作技術により作られていたのか。今回は、当時の樹種選択・木取り・加工・完成に至るまでの工程とその製作方法を検討することを目的に、現代の工具と技術を代用し、実寸大による復元製作をおこなった。なお、復元製作に伴う資料の選定・検討方法・考察は筆者がおこない、製作をWOOD LANDER'S 木那に依頼して実施した。

復元製作のモデルとして選定した出土資料は次の2点である。一つは、舟形の浅鉢状容器（No. 96580）（付図1-3）である。最終的な完成品の製作には実物資料の樹種と同じハリギリを使用した。もう一つは、スプーン形柄付容器（No. 96925）（付図2-17）である。本例も、最終的な完成品の製作には実物資料の樹種と同じクワ属を使用した。これらの復元製作の工程については、図2、表2に提示する^(註7)。以下に、復元製作を通して明らかになった点を述べる。

第一は、容器を作り出す際に必要とされる木材の製材について、第二は、容器を作り出す際の削り落としについてである。No.96580では、器両端部が全体の高さよりもさらに高くなることや耳状の突起が作り出されることから、その分を見込んだ大きさの材が必要となる。一方、両端部を高く作り出すためには側面の器高を低くしなければならず、その分を削り落とすことになる。本例の場合、器の深さは残存部から3～4cmと推測され、両端部の高さが7.9cmであることから、両端部の高



図2-1. 舟形浅鉢容器 (No.96580) をモデルとした現代の技術による復元製作の工程。



図2-2. スプーン形柄付容器 (No.96925) をモデルとした現代の技術による復元製作の工程。
(写真撮影協力：片岡祥光氏)

表2. 現代の技術による木製容器の復元と縄文時代の製作技術との比較。

●縄文時代の製作技術(推定)	●現代の技術による復元
石斧で木を切る	電動鋸で木を切る
↓	↓
くさびで木を割る	機械で木材の面取りや切抜きなどをおこなう
↓	↓
石器(大小の石斧など)で加工する	ノミや小刀で加工する
↓	↓
砥石などで表面を滑らかにする	カンナやサンドペーパーなどで表面を滑らかにする
↓	↓
(漆を塗る(彩色する)ものがある)	塗装をかける
↓	↓
完成	完成

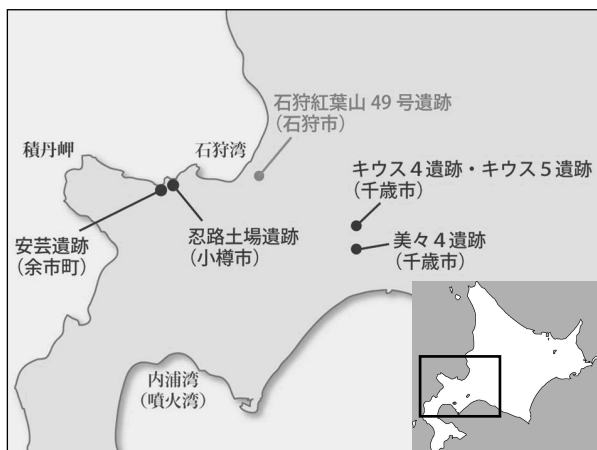


図3. 石狩周辺の木製容器の出土した遺跡（縄文時代）.



写真2. 小樽市忍路土場遺跡出土の片口舟形容器／縄文時代後期. 長さ：36.8cm, 樹種：ハリギリ
(小樽市総合博物館蔵, 筆者撮影)



写真3. 千歳市キウス4遺跡出土の脚付容器／縄文時代後期. 長さ：約50cm, 樹種：トネリコ属.
(北海道埋蔵文化財センター写真提供)

さを木取りすることのできる8cm以上の厚みをもつ材料を用いる必要がある。さらに、加工の段階には、両端部の高まりを作り出す分を削り落とし、浅鉢状の容器を作り出すこととなる。No. 96925の場合も同様である。柄部と容器部を一つ

の材から削り出して作ることから、容器の深さ（本例の容器部分の深さは4.2cm）と柄部の長さを考慮した材料を用意する必要があり、製作時には柄部を作り出すために多くを削り落とさなければならない。一材から削り出すための厚みのある材を用意し、加工の際には多くを削り落とすことで成形する製作技法は、本遺跡における木製容器の特徴の一つである。なお、加工用具については、本遺跡において刃幅の異なる磨製石斧や複数の斧柄の出土資料が認められることから、大小の石斧が加工に応じて使用されていたものと推測される。

第三は、木製容器の精巧かつ丹念な仕上げについてである。石狩紅葉山49号遺跡の木製容器には、器壁の厚さが薄く平滑なものが多い。粗い加工痕はあまり残されておらず、仕上げの段階に整えられた可能性がある。仕上げに用いられた工具については具体的に明らかではないが、想定される方法としては、砥石またはトクサ（砥草）により擦ることや、石製スクレーパーで表面を搔いて削ることが考えられる（註8）。

5. まとめと課題

最後に、石狩紅葉山49号遺跡における縄文時代中期の木製容器の特徴を整理し、まとめにかえる。

第一に、容器の大きさは樹皮製容器も含めて長さが30cm未満から1m程のものまでがあり、大・中・小さまである。第二に、器の形態における多様性と斉一性についてである。とくに「タイプA」については「舟形容器」と一括して呼ばれる傾向にあるが、長さとの比率は規格化されているわけではなく、細身のものから幅の広めのものまでさまざまである。また、底部から側面の立ち上がりについても、明瞭に立ち上がるもの・丸みをもつもの・浅く緩やかに立ち上がるもの・側面をもたないものがあり、浅鉢状や皿状の容器がみられる点も多様性を示す特徴である。一方、斉一的な特徴では、木製容器の端部に突起状の部分

を作り出すものが多く見られる点が挙げられる。器の大きさや形態に多様性がみられる一方で、細部の加工に斉一的な点が認められるところも、本遺跡の木製容器の特徴である。第三に、器に用いられる樹種と木取りについてである。器に用いられた樹種はハリギリが約半数を占めている。材料の入手、内面の多くを削る必要のある加工、機能・用途の面で、ハリギリが器に適した樹種として選択されていた可能性が考えられる。また、木取りについては、主に「横木取り」を基本として作られている。第四は、製作技術とその計画性についてである。木を素材とした器の製作において、両端部をやや高くすることや柄部や突起を作り出すことは、容器作りのための製材の段階から考慮する必要がある。材の多くを削り落としながら造形する製作技法は、可塑性に優れた粘土で作る土器の造形方法とは大きく異なるところである。樹種選択・製材（木取り）・加工・仕上げ・完成に至る一連の工程における計画性の高さが窺える。

今後の課題としては、主に次の2点が挙げられる。一つは、本遺跡における木製容器の機能・用途についてである。器としての土器との機能・用途の違いをはじめ、関連遺物や遺跡の性格を含めた考察を深めていくことが必要である。もう一つは、石狩低地帯およびその周辺遺跡における縄文時代の異なる時期の木製容器との比較研究、さらには日本列島における縄文時代の木製容器との比較研究についてである。石狩低地帯周辺における縄文時代後期の木製容器としては、千歳市キウス4遺跡・キウス5遺跡・千歳市美々4遺跡・小樽市忍路土場遺跡・余市町安芸遺跡の出土例がある（図3）（北海道教育委員会，1979；北海道埋蔵文化財センター，1989，1997，1998，1999，2003，2004；余市町教育委員会，2003）。これらの遺跡から出土した木製容器のうち、特に横長な形態をもつ容器と石狩紅葉山49号遺跡（縄文時代中期）の出土例を比較すると、「横木取り」を基本とする製作方法は共通しているものの、形態的特徴においては相違している。例えば、忍路土場遺跡出土の片口舟形容器では、全体的に厚みがあ

り、器の片端部には注ぎ口が作られている（写真2）。また、忍路土場・キウス4・安芸遺跡から出土している方形の容器には、器の底に脚部が作り出されている（写真3）。このような、注ぎ口を明瞭に作る片口舟形容器や脚付容器については、石狩紅葉山49号遺跡の木製容器の中に確認されていない。さらに、石狩紅葉山49号遺跡の木製容器に特徴的である両端部に耳状突起をもつ木製容器（付図1-1・2・3）については、今のところ、当該地域の縄文時代後期に属する木製容器に類例を見ることはできない（註9）。

当該地域における縄文時代の木製容器を対象とした先行研究については、山田昌久による検討（山田，1989）、三浦正人による検討（三浦，2003，2012）、個別の資料紹介（北海道埋蔵文化財センター，2004）等があるが、取り上げられる機会は少なく未解明な点も多い。木製容器の系統性や機能・用途の問題を整理しながら、これまであまり知られることのなかった縄文時代における木製容器の製作技術や用途について、さらなる解明を求めて研究を進めていきたい。

付記：本稿に記した調査研究成果については、テーマ展「縄文の木の器」（会場：いしかり砂丘の風資料館，期間：2013年8月28日～11月11日）、ミニ展示「縄文時代の木の道具～木の器～」（会場：石狩市民図書館，期間：2014年1月21日～2月4日）の展示の一部に公開したものである。現代の技術による復元製作については、完成品に加え、製作工程や木取り等を観察できるよう、製作途中品についても復元製作し、触れる資料として展示した。

謝辞：本調査研究にともなう資料調査・資料集成に当たり、小樽市総合博物館、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、余市町教育委員会、ならびに、石川直章氏・小川康和氏・田口 尚氏・三浦正人氏・山本侑奈氏にお世話になりました（五十音順）。復元製作では、片岡祥光氏（WOOD LANDER'S木那）によるご協力と現代の木工製作の視点から貴重なご助言をいただきました。また、日頃より当館の学芸員をはじめ倉 雅子氏・木戸奈央子氏から多くのご協力をいただきました。末筆ながら心より感謝申し上げます。

(註1) 付図1, 2に掲載した実測図を報告書(石狩市教育委員会, 2005)から転載するに当たり, 図の向きを変えて配置したものを含む。とくに, 器の先端部が残存しているものについては先端の向きを下側に揃えて掲載し, 柄付容器については柄を上方に向けて掲載した。そのため, 器の内外面の配置が逆になっているものがある。器の内面が展開図の右側に配置されているものは, 付図1-5, 付図2-10・14・17・18であり, その他は展開図の左側に内面が図示されている。各図の出典は付表1に記した。

(註2) 本遺跡の木製容器には舟のような細身のものばかりではなく, 長くはあるが幅の広めに作られたものもある。したがって, 本遺跡の「舟形容器」と呼ばれる木製容器が「舟」を表現しているのかは現時点では明らかではなく, 小稿では外観的特徴による名称として「舟形」の呼称を用いている。なお, 報告書(石狩市教育委員会, 2005)では, 木製容器について「舟形容器」・「浅鉢」・「片口容器」・「樹皮容器」・「柄付き容器」に分けて整理されているが, 本稿では14頁に提示した表1の分類に基づいて記述しており, 分類基準は異なるものとなっている。特に, 報告書では「片口容器」とするカテゴリーが設定されているが, 本稿では設定していない。理由は, 小樽市忍路土場遺跡の片口舟形容器(写真2)に見られるような, 明瞭な注ぎ口をもつ片口容器とは異なると考えるためである。

(註3) 付図1-1については, 器の片端部の耳状突起の左右に小孔が穿たれており, これを動物意匠(クマの顔)とする見方もある(石狩市教育委員会, 2005: 293-294)。

(註4) 本資料では漆層3層が観察され, 透明漆を木胎に直接塗り, その上にベンガラを混ぜた漆が2層重ねており, 本来は外面にも塗られた可能性が高いことが指摘されている(石狩市教育委員会, 2005: 74-75, 294-295)。

(註5) 付図2-15には樹皮製容器の本体部分のみを掲載した。報告書(石狩市教育委員会, 2005)には, 本図に加えて結び目の図版も掲載されている。

(註6) 樹種については, 報告書(同上)に掲載されたデータに基づくものである。

(註7) 製作途中品については別の樹種の木材を代用しておこなった。

(註8) 現在の木製品製作における仕上げの加工技術の

一つとして, 金属製スクレーパーを用いて木面を掻き傷跡などを取り除いて平滑に整える方法があることを, 片岡祥光氏よりご教示いただいた。

(註9) 報告書では, 「一つの型式として定着していたものと考えられる」ことから, 「石狩紅葉山型舟形容器」と仮称可能な資料である」としている(石狩市教育委員会, 2005: 294)。

引用文献

- 北海道教育委員会, 1979. 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 美沢川流域の遺跡群III.
- 北海道埋蔵文化財センター, 1989. 小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡 第4分冊. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第53集.
- 北海道埋蔵文化財センター, 1997. 千歳市キウス5遺跡(3). 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第115集.
- 北海道埋蔵文化財センター, 1998. 千歳市キウス5遺跡(5)第2分冊. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第125集.
- 北海道埋蔵文化財センター, 1999. 千歳市キウス4遺跡(3). 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第134集.
- 北海道埋蔵文化財センター, 2003. 千歳市キウス4遺跡(9). 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第180集 第2分冊.
- 北海道埋蔵文化財センター, 2004. テエタ 北海道埋蔵文化財センターだより, 12.
- いしかり砂丘の風資料館編, 2013. 平成25年度テーマ展 縄文の木の器(リーフレット).
- 石狩市教育委員会, 2005. 石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書 第1～3分冊.
- 三浦正人, 2003. 縄文・続縄文の木の文化. 野村崇・宇田川洋編, 新 北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化. 北海道新聞社, 79-82.
- 三浦正人, 2012. 11章2 後期旧石器・縄文・続縄文時代. 伊藤隆夫・山田昌久編, 木の考古学. 海青社, 133-138.
- 山田昌久, 1989. (2) 縄文時代のうつわを探る—縄文時代後期木製容器からの検討—. 小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡, 87-96.
- 余市町教育委員会, 2003. 余市町安芸遺跡.

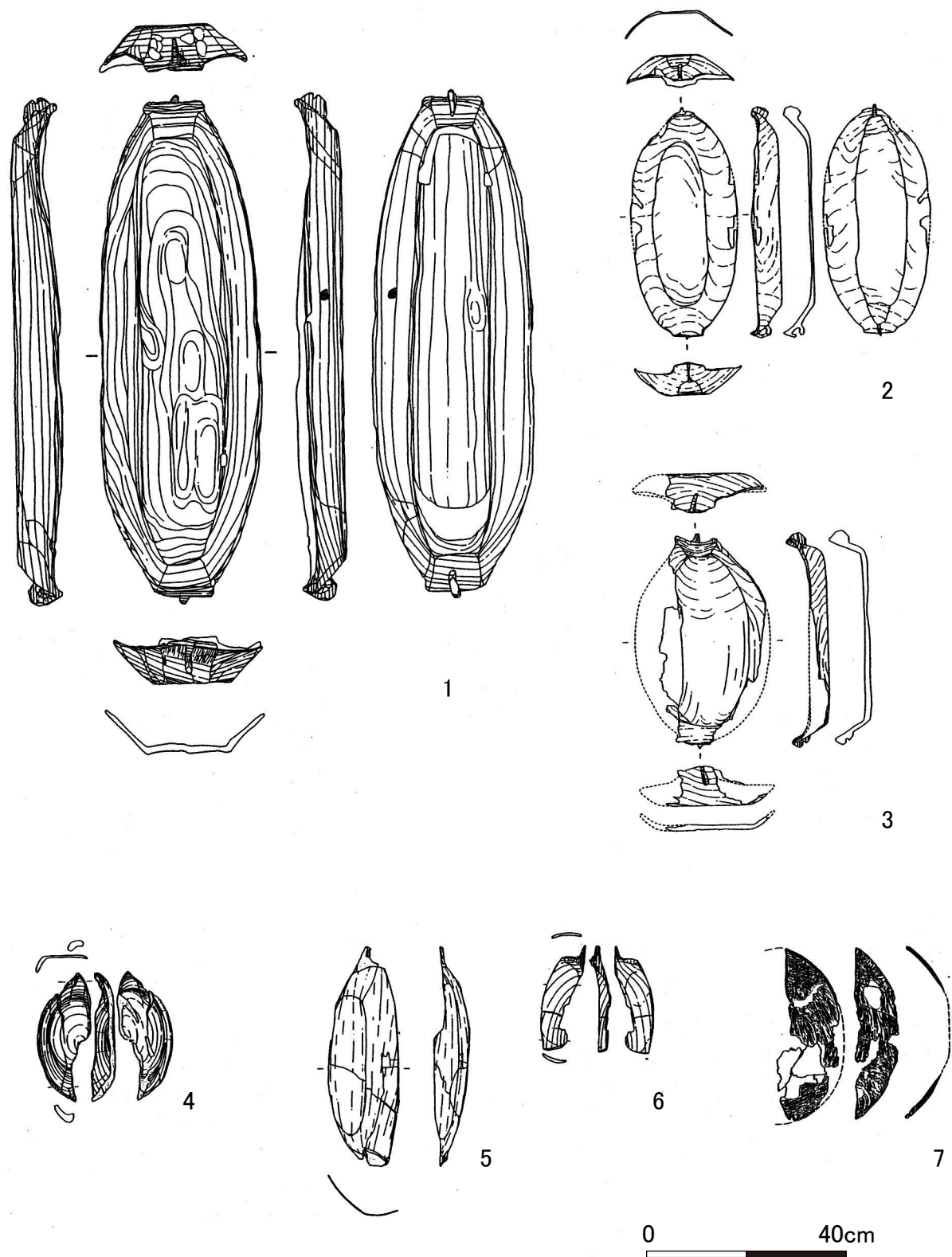
Wooden vessels of the Middle Jomon period excavated
from *Ishikari Momijiyama No.49* Site, Hokkaido, Japan

Chie ARAYAMA

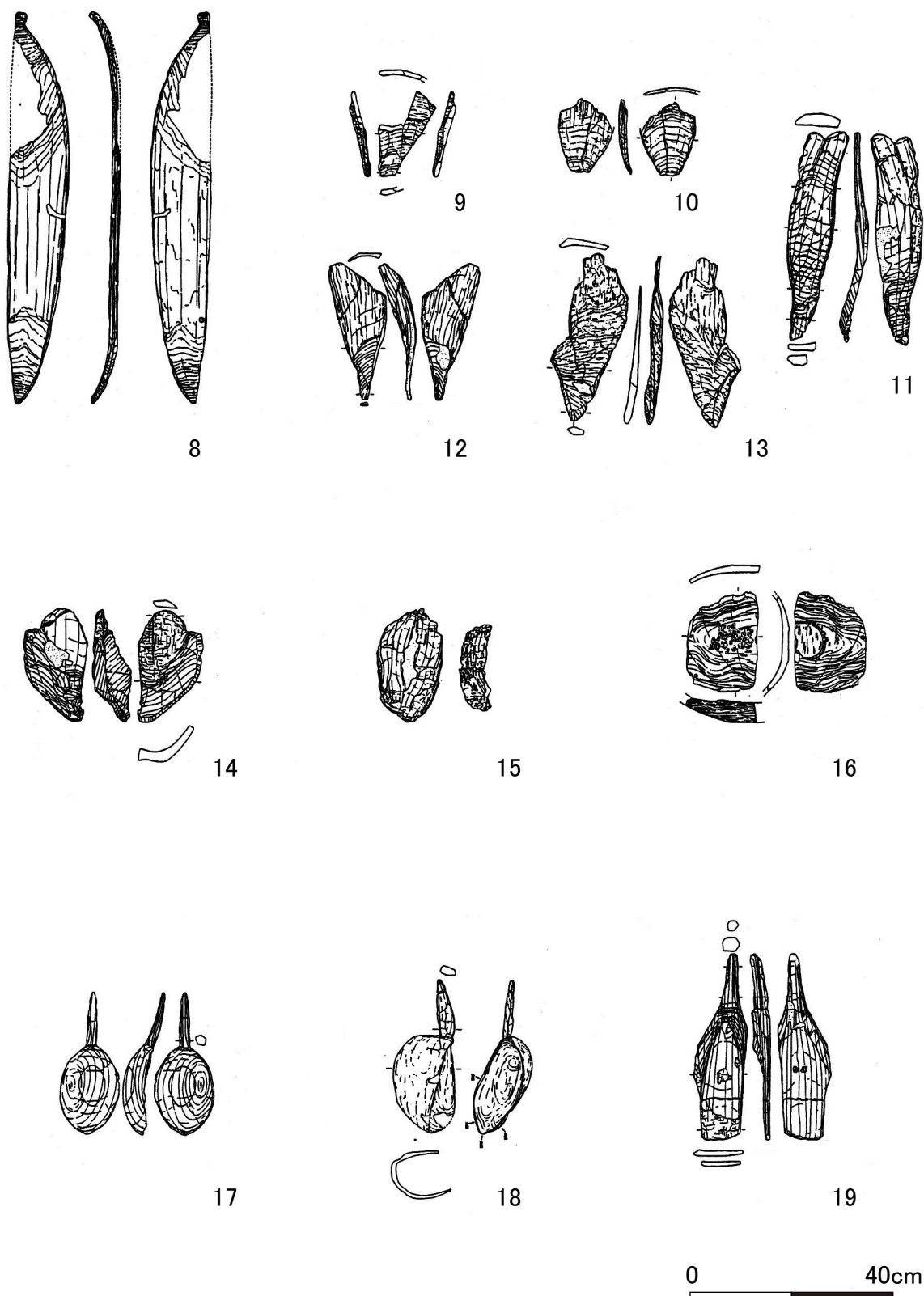
Abstract

A lot of wooden artifacts of the Middle Jomon period (about 4,000 years ago) were excavated in *Ishikari Momijiyama No.49* site. This report considers the excavated wooden vessels in particular in this site. The discovery of wooden vessels belonging at this time is very scarce in Japan. Therefore, this archeological evidence is important in elucidating the characteristics of the wooden vessels of the Jomon period.

Key words: *Ishikari Momijiyama No.49* site, Middle Jomon period, wooden vessel, process and technique for making, reconstruction



付図1. 木製容器(1) 石狩紅葉山49号遺跡／縄文時代中期.



付図2. 木製容器（2）石狩紅葉山49号遺跡／縄文時代中期.

紀要掲載 図番	遺物No.	器 種	タイプ	樹 種	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	備 考	付図出典 (報告図番)
1	付図1-1 89605	舟形浅鉢状容器	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	1017	354	87	器厚25.0mm	第629図1
2	付図1-2 96769	舟形浅鉢状容器	A	カエデ科カエデ属	465	215	50 最高66	器厚10.0mm	第632図4
3	付図1-3 96580	舟形浅鉢状容器	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	432	(206)	24 最高79	器厚13.0mm	第631図3
4	付図1-4 97150	舟形浅鉢状容器	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(257)	(103)	37	器厚2.0~6.0mm	第637図11
5	付図1-5 96608	舟形浅鉢状容器	A	モクレン科モクレン属	(437)	(145)	72	器厚3.0mm	第634図7
6	付図1-6 96674	舟形容器の一部か	A?	クルミ科クルミ属オニグルミ	(210)	(60)	(18)		第636図9
7	付図1-7 83746	舟形?浅鉢状容器	A	モクセイ科トネリコ属	(342)	(122)	(81)		第633図6
8	付図2-8 89800	舟形皿状容器	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(787)	(127)	(11)	器厚12.0mm	第630図2
9	付図2-9 84067	舟形容器の一部	A	クワ科クワ属?	(167)	(91)	(19)		第639図14
10	付図2-10 88047	舟形容器の一部	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(147)	(105)	(16)		第640図15
11	付図2-11 92005	舟形容器の一部	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(412)	(88)	(25)		第641図20
12	付図2-12 98536	舟形容器の一部	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(267)	(102)	(41)		第644図31
13	付図2-13 82326	舟形容器の一部	A	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ?	(333)	(112)	(20)		第639図13
14	付図2-14 97167	舟形浅鉢状容器の一部	A	モクセイ科トネリコ属	(221)	(125)	(40)	器厚5.0~12.0mm	第644図30
15	付図2-15 96626	樹皮製容器 (舟形浅鉢状容器)	E	広葉樹の樹皮	229	128	(20)	器厚1.0~2.0mm	第638図12
16	付図2-16 83466	浅鉢?高台付漆塗容器	B	クワ科クワ属?	(192)	(141)	(12)		第633図5
17	付図2-17 96925	柄付容器	C	クワ科クワ属	278	117	42	柄部分108.0×21.0×18.0mm 器厚1.0~5.0mm	第636図10
18	付図2-18 96633	柄付容器	C	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	307	120	100	内径187.0×79.0mm 器厚10.0mm	第635図8
19	付図2-19 96736	柄付容器	D	モクセイ科トネリコ属	(365)	(98)	(12)		第645図32
20	— 88559	容器の一部	—	—	(100)	(59)	(13)	一部? 器厚10.0mm	第640図16
21	— 88705	容器の一部	—	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(235)	(104)	(26)	器厚13.0mm	第640図17
22	— 88960	容器の一部	—	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	(195)	(109)	(17)	器厚10.0mm	第640図18
23	— 91385	容器の一部	—	—	(153)	(81)	(14)	器厚10.0mm	第641図19
24	— 92404	容器の一部	—	—	(89)	(37)	(10)		第642図21
25	— 96285	容器の一部	—	—	(134)	(33)	(13)		第642図22
26	— 96718	容器の一部	—	—	(133)	(35)	(13)		第642図23
27	— 96751	容器の一部	—	バラ科サククラ属	(255)	(81)	(18)		第642図24
28	— 96757	容器の一部	—	—	(76)	(72)	(15)		第642図25
29	— 96849	容器の一部	—	—	(59)	(54)	(13)		第642図26
30	— 97016	容器の一部	—	—	(118)	(92)	(20)		第642図27
31	— 97301	容器の一部	—	—	(85)	(61)	(19)		第642図28
32	— 97091	容器の一部	—	—	(534)	(88)	(19)		第643図29
33	— 89047	加工痕のある木(容器の未成品か?)	—	カエデ科カエデ属	311	166	83		第646図33

付表1. 石狩紅葉山49号遺跡出土の木製容器一覧。

() 内の数値は現存部分の計測値。

